

# とよなか ゆめ・まち・ひと

リレーエッセー

我が懐かしの豊中、

若き日を振り返って…

私は昭和30年（1955）に大阪市の船場に生まれました。その後すぐに、父の仕事の関係で兵庫県の伊丹市に引っ越し、飛行場のすぐそばで育ちまして、ちょうど前回のオリンピックの年、8歳の時にまた船場に戻りました。ですから、最初は豊中市とは全くご縁が無かったのです。

豊中との最初のご縁は小学校5年・6年生の頃。小学校が持っていた宿泊施設「集英寮」にクラス全員で出掛けた泊まりがけの林間学校でした。私は8歳の時の引っ越しで、大阪市北浜の証券街のど

真ん中にあつた市立集英小学校（現・開平小学校）に転校。転校生というのは、いつの時代も居心地の悪いものですが、この林間学校で服部緑地に出掛け、まるで竹やぶがジャングルみたいな緑地を抜けて行くのがとても楽しく、いつの間にか、皆ととても仲良しになっていました。いじめなんて全く考えられませんでしたね。そして、この小学校生活の終わりにギターに出合い、私の人生の方向が決定したのです。あれから半世紀以上がたった今も、私の大阪での演奏会となると、この小学校の

仲間が大勢聴きに来てくれます。実にありがたいことです。次のご縁は中学3年生の時。ちょうどこの時大阪万国博覧会が開かれ、御堂筋線に乗って足しげく千里のイベント会場に通うようになりました。そして、この万博の時に外国人宿舎として建てられた団地が千里ニュータウンの一角に取り込まれ、一般公募が始まりました。万博以来、千里のモダンな雰囲気は憧れていたわが家もダメ元で応募したのですが、これがなんと当選！すぐに引っ越しが決まり、豊中での生活が始まったのでし

ふく だ しん いち  
福田進一 [ギタリスト]

中学生の頃から昭和52年（1977）に渡仏するまで豊中で過ごす。同56年パリ国際ギターコンクールでグランプリ優勝。以後35年にわたり、ソロ・リサイタル、主要オーケストラとの協演、超一流ソリストとの共演を続け、世界中のファンを魅了している。ディスコグラフィーは100枚に迫り、令和元年（2019）には5枚のアルバムをリリース。平成19年度「外務大臣表彰」、同23年度芸術選奨「文部科学大臣賞」を受賞。



© Takanori Ishii



た。ビルのひしめく大阪市内から、緑が多く空気の澄んだ千里中央に移り、休日には近くの竹やぶや公園などで、景色を眺めながら散策を楽しむようになりました。

その春から私は大阪市内の谷町にある高校に通い始めましたので通学は往復2時間弱。とにかく1時間でも多くギターを練習したいので生活サイクルを変えました。夕方、学校から帰るとまず練習。夕食後も練習、そして寝てしまいます。だいたい夜9時から朝3時か4時まで就寝。そして朝シャン、朝食、学校の勉強を2時間して出掛けます。こんな生活を3年続けました。今考えると、ストイックですね。でも疲れがたまってしまう日は、帰りの御堂筋線で居眠りしてしまい、千里中央駅での折り返しも寝過ごして、あれ？と気が付いたら電車が天王寺方向、南に向かって走っている(汗)なんてことも(笑)こんなやり方でしたが、割



## Q. ギターの魅力はなんですか？

A. ギターの魅力は、なんと言ってもその音色にあります。繊細で温かく、心和ませる音色。誰が弾いても同じ音が出るわけではなく、はっきりと個性的な表現が可能な楽器であること。また、両手の指が直接弦に触れて音を出し、楽器の振動をしっかりと胸に感じる。このギターとの一体感は他の楽器では得られない貴重なものだと思っています。



とスムーズに関西大学に進学できました。まあ、本当は音楽大学に行きたかったのですが、当時の日本には音大にギター科が無かったのです。じゃ、隣の吹田市の関大が近くていいや、などと失礼な気持ちで入学したのですが、結局は続かず、2年で中退。ギターを本格的に学ぶために進路をパリに軌道修正したのでした。

さてこの続き、その後の私

の人生ですが、拙著『6弦上のアリア(学研プラス)』を上梓しましたので、ぜひ読んでいただきたいと思います。

最近長年の東京暮らしですが、実家は豊中にあるので、年に4回ほど帰省して家族との時間を楽しんでいます。大阪音楽大学には生徒たちも待っています。これからも、いつの間にか深くなった豊中の地とのご縁を大事にしたいと思っています。